影のジャック／*Jack of Shadows*（1971）／ロジャー・ゼラズニイ（荒俣宏訳）／サンリオ（文庫・4/5刊・¥400）

既存のイメージを覆すのは、何につけ冒険である。六〇年代後半を、文字どおり席捲したゼラズニイだが、少なくとも評論家たちは、本書をほとんど評価しなかった。

暗黒界の住人、影のジャックは、盗みに失敗し、死を宣告される。暗黒界人には、死は一時の空白にすぎない。死のたびに、「堆屍穴」で甦るだけだった。彼は、死に追いやった者たちに、復讐を決意する。

かくして、科学の世界である陽光界、薄明界をまたに、古代の魔術を手にした、ジャックの征服の旅がはじまる。

ゼラズニイの本領は、その文章力とテンポの速さにある。これは、ヒロイック・ファンタジイに、そのテンポを取り入れた作品といえよう。ただ、『光の王』に見られた構成力は希薄であるし、文章も相当簡潔なものとなっている。もちろん、作者なりの計算があってのことだろうが……。あいにく、本書だけでは、意図がわかりにくいのだ。結局、この試みは、アンバーものの後期に至って、実を結ぶことになる。初期作で強烈な印象を残したゼラズニイであるからこそ、既存のイメージを覆すのが、難しいのである。（俊）